

“様式化したジャガー頭部” 石彫について (1)

——チャルチュアパ遺跡群エル・トラピチェ地区出土石彫を中心に——

伊 藤 伸 幸

チャルチュアパ遺跡群はメソアメリカ南東部太平洋側地方の南端に位置している（図1）。1995年から、チャルチュアパ遺跡群（図2）において調査を継続してきた。この調査の目的は、シャーラーが1970年代につくった考古学編年（Sharer ed., 1978）を検証することであった。2012-2014年には、エルサルバドル共和国文化庁遺産局考古部と名古屋大学が共同で、同遺跡群カサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区において考古学調査を実施した。調査の目的は、石彫文化の解明を中心として、先古典期中・後期の文化とオルメカ文化からマヤ文化に至る文化の変遷を明らかにすることであった。

本稿では、2012-2014年調査において出土した“様式化されたジャガー頭部” 石彫について、2回に分けて考察する。今回は発掘調査に関連して、今回はこの石彫の儀礼的な側面を中心に考察する。



図1 メソアメリカで石彫が出土した先古典期の主な遺跡

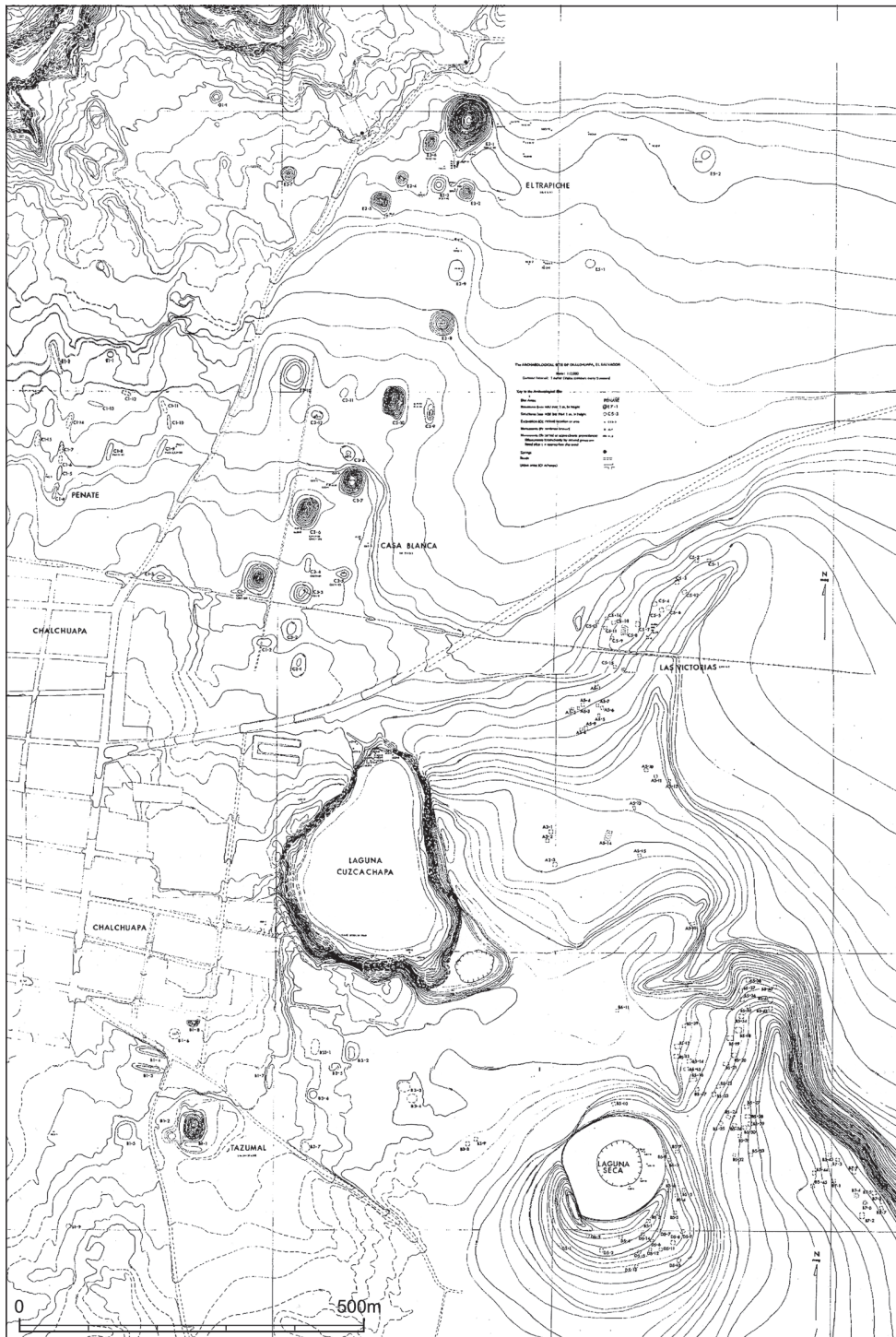


図2 チャルチュアパ遺跡群 (Sharer, 1978を改変)

1. チャルチュアパ遺跡群における石彫

チャルチュアパ遺跡群における最大の建造物は、エル・トラピチェ地区 E3-1 建造物とタスマル地区 B1-1 建造物の 2 基である。E3-1 建造物は先古典期中～後期に属し、約 24m の高さがある。一方、古典期に属する B1-1 建造物は大きな基壇の上に建てられており、E3-1 建造物に次ぐ 20m 余の高さである (Sharer ed., 1978)。

ところで、タスマル地区では、“タスマルの女王若しくは処女”と名付けられた石彫 (21 号記念物) が B1-1 建造物の西側斜面からみつまっている。他に渦巻文が彫られた石彫や 22 号記念物が B1-1 建造物と関連して出土している。一方、エル・トラピチェ地区においては、E3-1 建造物の南側平坦面でこの建造物の基線上に 1、2、3、10 号記念物が出土している。時期は先古典期後期とされる。また、先古典期中期に相当する E3-1-2nd 建造物から、7 号記念物が出土している。カサ・ブランカ地区においては、C3-6-1st 建造物の基部から古典期中期とされる 17 号記念物 (素面の石碑) が出土している (Sharer ed., 1978)。C3-6 建造物の南正面の平坦部から先古典期後期とされる素面の石碑 1 基、祭壇 1 基、様式化されたジャガー頭部小石彫 1 基が出土している (Ichikawa, 2007)。また、同地区においては、京都外国語大学の調査において、先古典期後期もしくは古典期に属する石彫 2 が C3-3 建造物北側基部から出土した。この調査では、時期は確定できないが、他に石彫 2 基が出土している。この調査以前にも時期不詳の石彫 1 基が出土している (伊藤 2000)。

2. 石彫の配置方法について

現在に至る考古学調査で明らかにされたメソアメリカにおける石彫の配置から、チャルチュアパ遺跡群における石彫の配置に関する仮説を以下に示す。

(1) メソアメリカにおける石彫

メソアメリカにおける石彫製作は先古典期前期のオルメカ文化に始まる。メキシコ湾岸地方のサン・ロレンソ遺跡で、最も早い石彫が出土している。同遺跡では、列状に並んで出土した数基の石彫や低い基壇上に据えられた石彫など、石彫の配置について興味深い出土例が報告されている (Coe y Diehl, 1980)。さらに南に位置するラ・ベント遺跡では、建造物の正面に多くの石碑が建てられた。また、建造物正面に配置された石碑の前に祭壇が置かれることもあった (González, 2004)。オルメカ文化はメソアメリカの初期石彫文化を創ったといえる (伊藤 2011)。

メソアメリカ南東部太平洋側地方にあるイサパ遺跡では、“物語的”とされる新しい石彫であるイサパ様式が作り出され、石碑の前に祭壇を置く習慣が一般的になる (Lowe et al., 1982)。後代にメソアメリカで一般的となる“石碑—祭壇”という組み合わせはイサパ文化で

確立された。また、建造物正面や建造物に囲まれた広場でみられる基線の上に石彫が配置されていた。

同地方にあるタカリク・アバフ遺跡では、オルメカ様式とマヤ様式の石彫がみられる。200基以上の石彫が、建築や石彫の配置における基準となる基線に従って、建造物やテラスの正面に配置され、そのなかには石碑と祭壇の組み合わせもみられる (Orrego C., 1990)。

グアテマラ高地のカミナルフユ遺跡は、先古典期後期におけるメソアメリカ最大の都市のひとつである (Hatch, 1997; Shook y Hatch, 1999) が、この遺跡では、基線を基準にして200基以上の建造物が整然と建てられ、カミナルフユ・イサバ様式若しくは初期マヤ様式の石彫が多数つくられた (Parsons, 1986)。メソアメリカ南東部太平洋側地方では、初期マヤ文化が独自の石彫様式を作り出し、マヤ低地やエルサルバドルへ広げていった (e.g. Sharer ed., 1978)。

(2) メソアメリカ南東部太平洋側地方チャルチュアパ遺跡群の石彫

チャルチュアパ遺跡群にはオルメカ、マヤ、トルテカなど、様々な石彫様式がみられる。チャルチュアパ遺跡群は、エル・トラピチュ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区に分けられる (図2)。しかし、現時点ではエル・トラピチュ、カサ・ブランカ、タスマルの3地区でしか石彫の出土例がないが、30基以上の記念碑的な石彫が出土している。これら石彫の多くは、考古学調査による出土ではない。今までの調査によると、建造物の前や建造物に囲まれた広場で石彫数基が出土した。こうした状況では、石彫の編年上の位置や文化的な意味を見出すことは難しい。

(3) チャルチュアパにおける文化交流

チャルチュアパ遺跡群において、メキシコ湾岸地方のオルメカ文化と類似する文化要素がみられる。しかし、メキシコ湾岸地方のオルメカ人がチャルチュアパを征服した痕跡はなく、また、その政治的な影響を与えたという直接的な証拠もない。ただ、メキシコ湾岸のオルメカ文化が何らかの文化的な影響を与えた可能性は否定できない。チャルチュアパ遺跡群において、石彫製作技術を含めた先進技術を取り入れる際に、他地域との文化的な交流が起こった可能性がある。一方、チャルチュアパ遺跡群においては、初期マヤ文化の痕跡がみられる。例えば、1号記念物は石碑の破片であるが、文字が彫られている。また、石碑(素面)と祭壇の組み合わせも出土している。先古典期後期、チャルチュアパ遺跡群では、初期マヤ文化の先進技術若しくは文化を取り入れようとしていたのである (Ito, 2008; 伊藤 2011)。

(4) チャルチュアパ遺跡群における石彫の配置

前述の出土事例を基に、先古典期におけるエル・トラピチュ地区とカサ・ブランカ地区における石彫の配置についての仮説を提示する。

現時点では、先古典期前期、チャルチュアパには石彫が出現していないと考えられる。先古典期中期では、エル・トラピチュ地区出土7号記念物、ラス・ピクトリア地区出土12号記念物とカサ・ブランカ地区出土の座像が考えられる。このなかでは、唯一、7号記念物が考古学調査

で出土している。この石彫は、先古典期中期に属する建造物を構成する集石の中から出土した。7号記念物以外の石彫2基は様式から先古典期中期のオルメカ文化に属する可能性がある。

先古典期後期に属する石彫には、エル・トラピチェ地区のE3-1建造物前から出土した1、2、3、10号記念物がある。また、カサ・ブランカ地区では、C3-6建造物正面から出土した素面の石碑と祭壇、そして様式化されたジャガー頭部小石彫がある。京都外国語大学調査で出土した石彫2は、この時期にC3-3建造物の西側基部に置かれた可能性がある。

チャルチュアパ遺跡群で出土した石彫には、オルメカ文化や初期マヤ文化と関連付けられる要素を持っている。例えば、建造物正面や建造物に囲まれた広場に石彫を配置していた。また、建造物の基線上に配列された事例もあった。チャルチュアパ遺跡群では石彫に関する考古学資料が乏しいが、オルメカ文化やマヤ文化と同様に、石彫を配置した事例がみられる。

以上のように考えると、チャルチュアパ遺跡群では、サン・ロレンソ、ラ・ベンタ、イサパ、タカリク・アバフ、そしてカミナルフユ遺跡にみられるような石彫の配置があったと考えられる。今までの発掘資料から、エル・トラピチェ地区とカサ・ブランカ地区では、石彫の配置について以下の仮説が考えられる。

1. 広場、建造物の正面などで石彫を建てた。
2. 建造物の基線上で石彫を列状に配置した。

3. チャルチュアパ遺跡群エル・トラピチェ地区調査 (2012-2014年)

2012年から2014年にかけて6次にわたる調査を実施したが、本稿では“様式化したジャガー頭部”石彫に関係する第1・2次調査について説明する。

(1) 第1次調査 (2012年3月)

前述の仮説を基にエル・トラピチェ地区とカサ・ブランカ地区における考古学調査を計画した。石彫が出土する可能性がある部分を明らかにするために、地下レーダー探査を実施し、異常のある部分を分析した。その結果、異常のある部分が、エル・トラピチェ地区とカサ・ブランカ地区で確認できた (Tanaka, Y. y K. Tanaka, 2014; 図3.1)。また、異常のある部分を確認し、石彫などの配置の規則性を分析した。

(2) 第2次調査 (2012年9月)

第1次調査の調査結果に従って、地下レーダー探査の分析結果を確認するために、エル・トラピチェ地区で、E3-1建造物の南側とE3-2, 3, 6建造物の近くで発掘調査を実施する地点選んだ (図3.2)。また、この調査は、先スペイン期の石彫配置に関して規則性があるかを確認する目的も持っていた。

E3-1建造物の南側では、建造物の基線に沿って異常が確認できたので、2×70mの1号トレンチを設定した (図3.2)。そして、第2次調査ではそのうちの40mを発掘することとし、10m

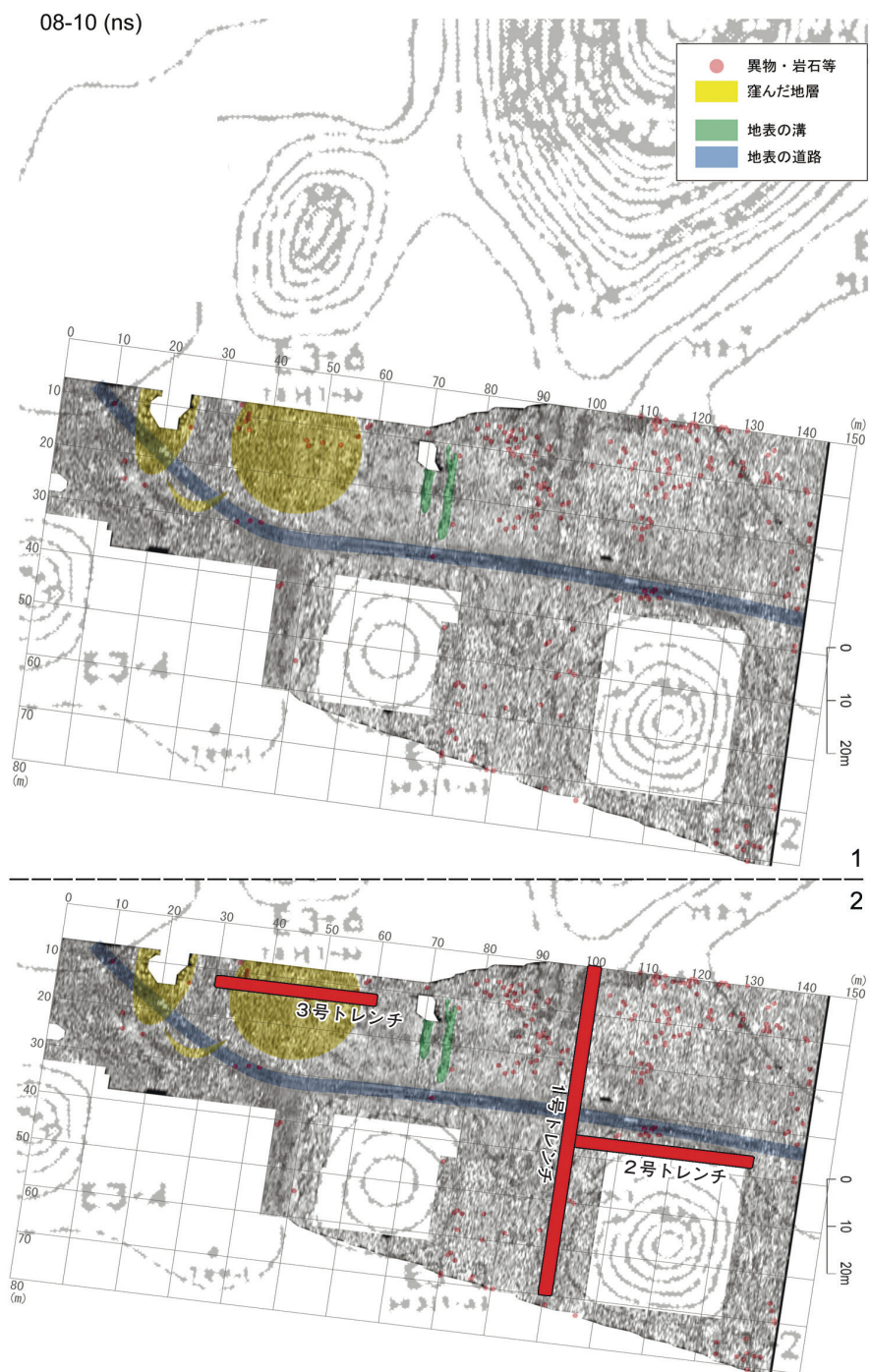


図3 チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区地下探査結果と1～3号トレンチ

1. 地下探査結果(田中地質コンサルタント2014を改変)、2. 設定された1～3号トレンチ(Ito, ed., 2014を改変)

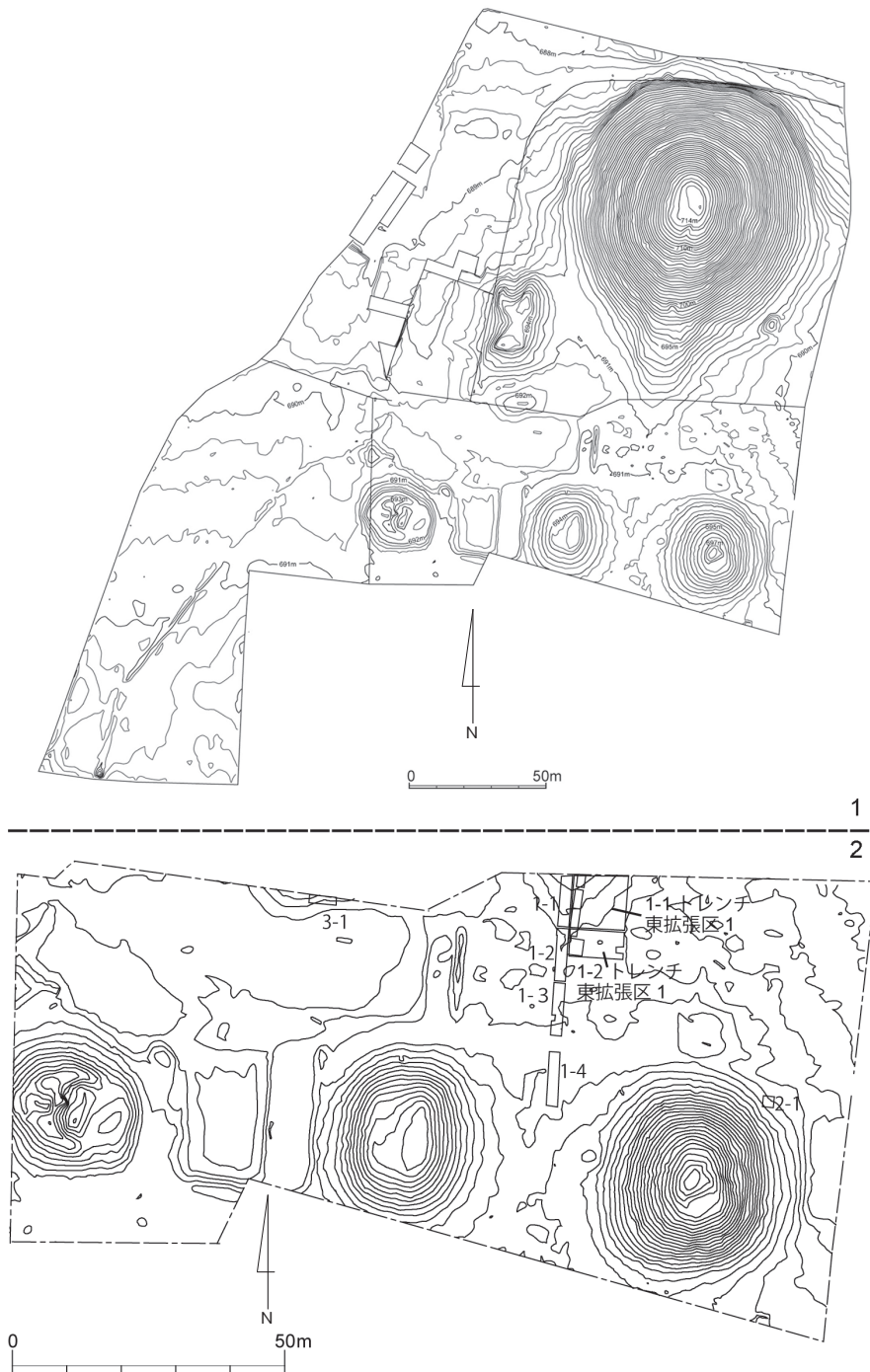


図4 エル・トラビチェ地区1・2次調査トレンチ配置図

1. サン・アントニオ農園測量図、2. トレンチ配置図（以上、Ito, ed., 2014を改変）

ごとにトレンチを分割し、1-1, 1-2, 1-3, 1-4とした(図4)。E3-2建造物の北東隅にも強い異常を確認したために、1号トレンチと直交する2号トレンチをこの異常部分の上を通るように設定した。今次調査では、この異常を確認するために、その部分に2×2mの試掘坑(2-1)を設定し、発掘を実施した。また、E3-6建造物の南に平面形が円形の鉢状の異常を確認したために、この円形部分を横断するように3号トレンチを設定したが、畑部分を避けるようにして、1.5×5mの試掘坑(3-1)を設定し発掘調査を実施した。

(3) チャルチュアバ遺跡群エル・トラピチェ地区における層位

ここでは、シャーラーが行ったペンシルバニア大学調査と2012-2014年調査とを比較して、表土から“様式化したジャガー頭部”石彫が出土した明茶褐色土層(=F.8)までの各層を説明する(図5)。

表土は茶褐色土層である。表土の下が、黒色土層である。これら2層は、ペンシルバニア大学調査のF.23層に相当する。その下の茶褐色土層は、F.21層に相当する。この層は、1-1トレンチ北部分と同東拡張区1では、薄くなり無くなっている。TBJと呼ばれるイロパンゴ火山灰である白褐色土層はF.20の相当する。この層は、1-1トレンチと1-1、1-2トレンチ東拡張区1で無くなっている。1-3～6トレンチでは、この火山灰層の直上と直下で、土をつき固めて造られた床が検出された。この火山灰層の下は明茶褐色土層があり、F.8に相当する。また、この層の上部に劣化した床面が検出された。

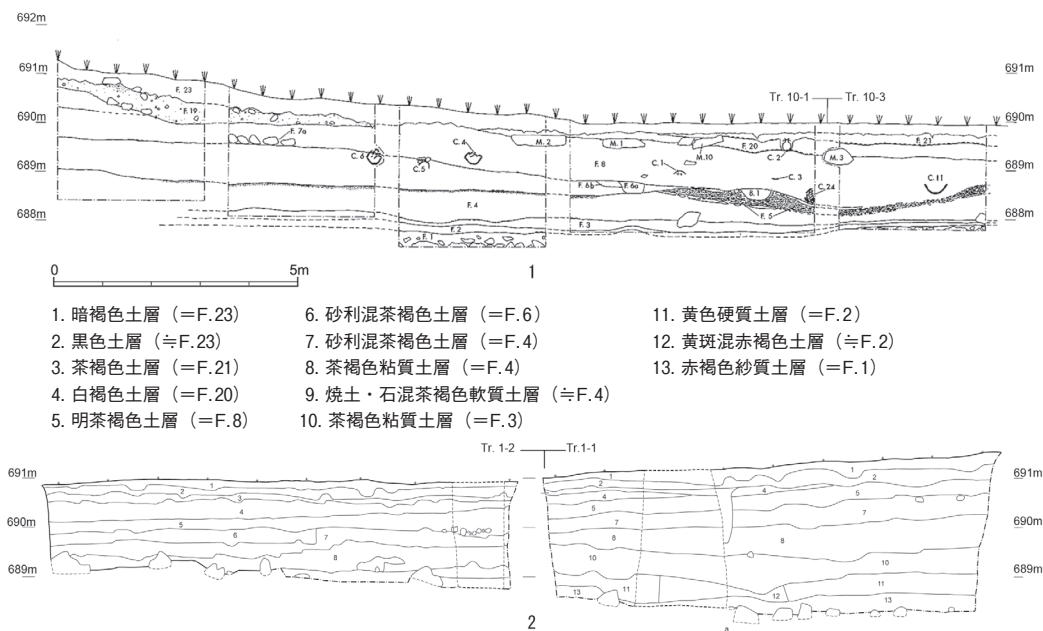


図5 エル・トラピチェ地区層位図

1. ペンシルバニア大学調査 Tr.10-1, 3東断面図 (Sharer, 1978を改変)、2. 名古屋大学調査 Tr.1-1, 2西断面図

4. 2012-2014年調査で出土した“様式化したジャガー頭部”石彫

“様式化したジャガー頭部”石彫2基以外にも、石彫1基が出土した(図6、7)。1-1トレンチで、彫刻面を下にして石碑破片が出土した。

(1) “様式化したジャガー頭部”石彫

1-2トレンチにおいて、コーヒーの木を植えるために掘られた穴を清掃している際に、石彫の一部が確認された。白褐色土(火山灰)を取り除くと、石彫の顔部分が全て現れた(図7、写真1、3)。石彫は明茶褐色土層に埋め込まれていたが、石彫を埋めるための穴は確認できな

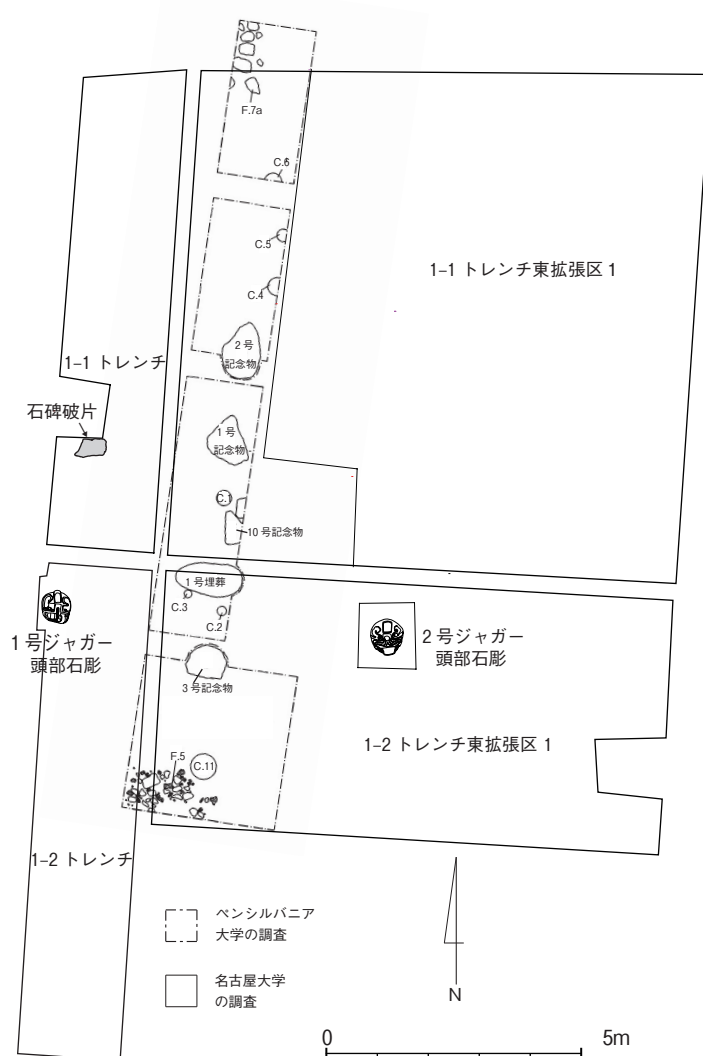


図6 1・2号ジャガー頭部石彫・3号記念物出土平面図 (Ito, ed., 2014を改変)

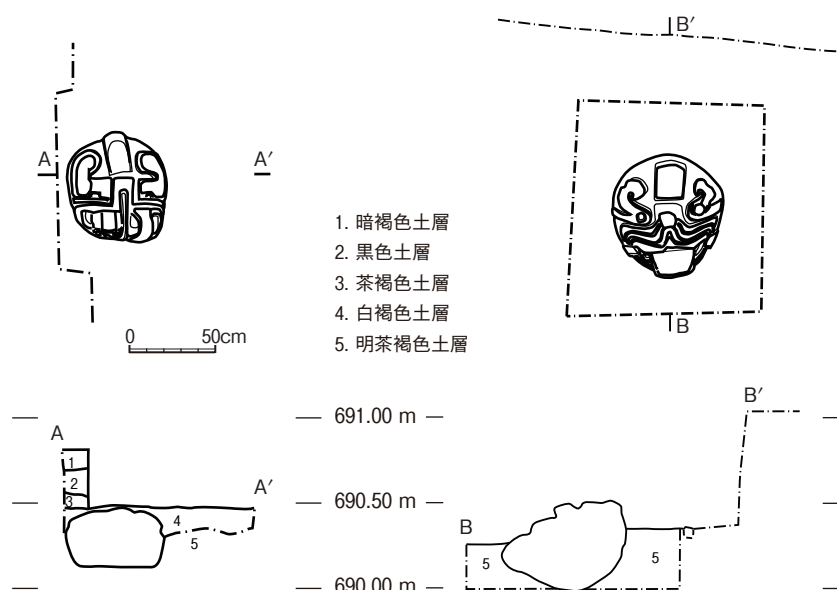


図7 1・2号ジャガー頭部石彫出土平面・断面図 (Ito, ed., 2014を改変)

かった。このため、床を造る際に、この石彫を置き顔の下端まで明茶褐色土を入れた可能性が高い。この石彫の下半分は円盤状の柄となっており、床面に埋め込むために柄を造った可能性がある。

1-2トレンチ東拡張区1においては、明茶褐色土層に埋められた状態で石彫が出土した（図7、写真2、3）。この石彫を埋めるために掘られた穴を確認するために、石彫周辺の発掘を実施した。しかし、穴の痕跡は全くなかったために、この石彫も明茶褐色土層が形成された時に置かれた可能性が高く、この石彫の場合には、顔の一部も埋めたと考えられる。

以上のことから、2基の石彫は明茶褐色土層が形成されるときに、その配置も計画された可能性が高い。また、1号ジャガー頭部は西に、2号ジャガー頭部は東にあった。明茶褐色土層が形成された時に、1号ジャガー頭部は同じ明茶褐色土の上に置かれ、顔全体が上から見えるように土が顔の下端まで入れられた。一方、2号ジャガー頭部は顔の一部のみが見えるように埋められた。据付け方の相違によって、1号には柄があり、2号は柄なしとしたかもしれない。また、この2基の石彫は、異なる目的があったと考えられる。

(2) “様式化されたジャガー頭部” 石彫の二面性

1号ジャガー頭部は左右若しくは東西で2つの部分に分けることができる。この石彫は動物を象徴し、2つの目は虚ろになっている。眼窩上の渦巻文は内から外に向かって巻いている。口腔部分には、下唇の上に舌状に垂れ下がっているものがある。この垂下部は、中央の溝に

よって2分されている。垂下部分左側は単純に2つに分かれている。右部分は縦方向に二分、横方向に三分割されている。合計6個の小区画があるが、上部の3区画にはU字文、下部の3区画には逆U字文が彫られている。更に、上部の最も中央部に近い小区画には小さな円形の突起がある。口腔内上部には鼻に向かって裂けた部分がある。鼻の上には長方形の突起部を持っている。

2号ジャガー頭部は、異なる左右の目を持っている。目の上に渦巻文があり、右目（西）は虚ろで、左目（東）は円盤状になっている。口腔には上歯茎から下唇にかけて舌状に垂下部分があり、鼻に向かって裂け目が観察できる。

石彫2基の顔の特徴を考慮すると、顔の右と左では異なる表現をしている。1号ジャガー頭部は顔の下部で、2号ジャガー頭部石彫は上部で差異がみられる。

(3) “様式化されたジャガー頭部” 石彫のエル・トラピチェ地区における出土状態

エル・トラピチェ地区では、現在までに“様式化されたジャガー頭部”石彫は3基出土している（図6）。ペンシルバニア大学が発掘した3号記念物（図6、写真4）、2012-2014年調査で出土したジャガー頭部2基（写真1～3）である。エル・トラピチェ地区最大の建造物であるE3-1建造物正面に、これらの石彫3基が置かれていた。これらの石彫を結ぶ線とこの建造物の南北方向の基線とはほぼ直角に交わっている。

層位をみると、新しい床面を造る際に1・2号ジャガー頭部石彫を配置し、顔が空を見るように置かれた。これらの頭部の上若しくは北に、E3-1建造物への昇り口がある。また、2号ジャガー頭部の東側もしくは外側から朝日が昇り、1号ジャガー頭部の西側若しくは外側に夕日が沈む。1号ジャガー頭部の内側（東）と2号ジャガー頭部の内側（西）はE3-1建造物の基線に近く、E3-1建造物の昇り口はその北方向の延長線上にある。つまり、1号ジャガー頭部の虚ろな左目と2号ジャガー頭部の虚ろな右目はE3-1建造物に上っていくものをみている。そして、1号ジャガー頭部の虚ろな右目は沈みゆく夕日を、2号ジャガー頭部の虚ろでない左目は昇りつつある朝日をみている。

(4) 1・2号ジャガー頭部石彫の意味

E3-1建造物の昇り口に立って、1・2号ジャガー頭部石彫の意味を考える（図4、6）。人工的な聖なる山もしくはE3-1建造物の上にある神殿に向かって歩いていくと、2つの虚ろな目が迎えてくれる。1号の左目と2号の右目である。この虚ろな目は“死”を意味しており、地下世界の入り口とされる神殿の入り口に向かうものを迎えている。聖なる神殿若しくは人工的な聖なる山と関係が深い。

一方、2号の左目は1・2号ジャガー頭部石彫の4つの目のなかで、最も東に位置している。同様に、1号の右目は、4つの目のなかで、最も西に位置している。つまり、太陽が沈み地下世界に向かう西に1号の虚ろな右目があり、地下世界から地上に生まれてくる東に2号の虚ろでない左目がある。従って、虚ろな1号右目は死を、虚ろでない2号左目は生を表している。

そして、これらの外側にある2つの目は、太陽の動きと密接な関係がある。

ところで、3号記念物は破壊された“様式化したジャガー頭部”石彫破片で、上半分に相当する(図6、7、写真4)。この石彫は、1・2号ジャガー頭部石彫の間、そしてE3-1建造物の入り口に位置している。この石彫は、東側の目が虚ろでなく、西側の目が虚ろである。このため、この石彫破片は太陽の動きを意識しておかれた可能性が高い。そして、この石彫は、儀礼的に殺され、神殿の入り口に捧げられ地下世界に送られたとも考えられる。また、この石彫が表現する動物若しくは怪物は、地下世界への案内をする役割を持っていた。そのために、“死”を表現する目と“生”を表現する目は、正しく太陽の動きを示す位置に配置されたのであろう。一方、殺された石彫は、太陽の動きと地下世界への入り口を確認し、道を間違えずに地下世界に向かうために、1・2号ジャガー頭部の間の神殿に向かう参道の上に置かれていた。また、メソアメリカでは、ジャガーなどの動物の口は、地下世界の入り口と考えられている。出土した1号ジャガー頭部石彫は、口腔部内が中央にある溝で左右に分かれている。これは、地下世界に入る入口が異なる可能性を示している。つまり、1号ジャガー頭部口腔部の西側は神殿の入り口に相当し、東側は太陽の沈む場所に地下世界に入る入口があったことを示している。

以上のことを考慮すると、E3-1建造物前に据えられたジャガー頭部石彫2基は2面性を持っており、生と死そして太陽の動きと関係が深い。また、それぞれが左右に分割でき2基で4つの顔を表現しているとも考えられる。

結びにかえて

2012-2014年の調査の結果はイロパング火山噴火の前と後にヒトの活動が絶えることなく続いていたことを教えてくれている。また、チャルチュアパ遺跡群エル・トラピチェ地区では、多くの石彫が出土している。今回の発掘調査では、イロパング火山灰に完全に覆われた“様式化されたジャガー頭部”石彫2基が、明茶褐色土の床に据えられた状態で出土した。

ところで、メキシコ湾岸では、エル・トラピチェ地区で出土した一対のジャガー頭部石彫と同様に一対の類似した頭部石彫がある。ラグナ・デ・ロス・セロス遺跡の先古典期に属する1・2号記念物である(写真5)(Medellin, 1960; Bove, 1978)。この1・2号記念物は、左右の目が異なる以外はほとんど同じ顔の特徴を持っている。出土状況もエル・トラピチェ地区の1・2号ジャガー頭部石彫に似ており、中央広場南西の小さな広場の6号建造物近くから出土している。チャルチュアパ遺跡群エル・トラピチェ地区出土の一対のジャガー頭部石彫と同じような役割を持っていた可能性がある。また、この1・2号記念物の近くから5号記念物が出土している。5号記念物はメキシコ湾岸で玉座とされる石彫であり、1・2号記念物は玉座と密接な関係を持っていた。そして、この2基の石彫頭頂部にあるくぼみは、何らかの儀礼的な

役割を果たしていたであろう。また、ラ・ベンタ遺跡では、ラグナ・デ・ロス・セロス遺跡 1 号記念物と同様に、左目が点文で右目が十字文が彫られた頭部石彫が出土している（写真 6.1；Berrin and Fields, ed., 2010）。

一方、メソアメリカには 4 つの顔を持った石彫がある。ラ・ベンタ遺跡 70 号記念物（写真 6.2）とカミナルフユ 10 号記念物（写真 7）である。前者は太った体と手足を持っているが、後者は胴部が無く、頭部のみである。もし、ラ・ベンタ遺跡からカミナルフユ遺跡に 70 号記念物の石彫の概念が到来したとするならば、カミナルフユ遺跡では 4 つの顔の概念のみを強調する現象が起こった可能性がある。そのために、カミナルフユ遺跡を中心とする地域で、縦柄付きの 4 つの顔を持つ頭部石彫が生まれたのかもしれない（写真 8）。また、カミナルフユ遺跡が属するメソアメリカ南東部太平洋側地方では、先古典期後期とされる丸彫りの太っちょの石像がみられる。その顔は、この 4 つの顔を持った石彫の顔と似ている。こうして考えると、ラ・ベンタ遺跡 70 号記念物の頭部の 4 つの顔を持つ部分の概念のみを具現化した石彫が、カミナルフユ遺跡 10 号記念物であり、太った胴部と顔一つのみを表現した石彫が、太っちょの石像である。つまり、他地域から来た概念を、在地の文化で受容するときに再解釈が行われ在地化した概念に基づく石彫が生まれたのかもしれない。“様式化したジャガー頭部”石彫は、一対の頭部石彫で 4 つ顔を表現したといえるが、カミナルフユ遺跡を中心とする地域の石彫文化の概念がその土地に適応もしくは順応した結果に作り出された石彫である可能性が考えられる。そして、エル・トラピチュ地区では、チャルチュエパ遺跡群における固有の宇宙観によってピラミッド神殿の入り口にこの種の石彫 2 基を据え付けたと考えられる。

謝辞 この調査の経費は、2011 年度三菱財団人文科学研究助成金（「マヤ文明の王権の起源と発展に関する研究」）の一部が使われました。また、地下レーダー探査では、(株)田中地質コンサルタントからご援助を賜りました。調査地のサン・アントニオ農園では、地主の Abraham Perdomo Pineda 氏と Carolina de Perdomo 夫人にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- Berrin, Kathleen and V. M. Fields (ed.)
 2010 *Olmec: Colossal Masterworks of Ancient Mexico*. Yale University Press, New Haven.
 Bove, Frederick
 1978 “Laguna de los Cerros, an Olmec central place.” *Journal of New World Archaeology* 2 (3): 1-56.
 Coe, M. D. and R. A. Diehl
 1980 *In the Land of the Olmec: The Archaeology of San Lorenzo Tenochtilán*. University of Texas Press, Austin.
 González L., R. B.
 2004 “Escultura monumental olmeca: Temas y contextos.” En *Acercarse y Mirar: Homenaje a Beatriz de la Fuente* (editado por M. T. Uriarte y L. S. Cicero), pp. 75-106.

- Hatch, M. P. de
1997 *Kaminaljuyú/San Jorge: Evidencia Arqueológica de la Actividad Económica en el Valle de Guatemala, 300 a. c. a 300 d. c.* Universidad del Valle de Guatemala, Guatemala.
- Ichikawa, A.
2007 *Informe Final: Proyecto de Reparación de Drenaje alrededor de la Estructura-5.* JOCV/JICA, CONICULTURA, San Salvador.
- Ito, Nobuyuki
2008 “Desde la frontera mesoamericana.” En *Olmea: Balance y Perspectivas*, (editado por M. T. Uriarte y R. B. González L.), pp. 583-603.
- Ito, Nobuyuki (ed.)
2014 *Informe Final del Proyecto “Investigación Arqueológica a Través de Sondeo Geofísico en el Área de El Trapiche, Chalchuapa” (2012-2014).* Dirección de Arqueología de la Secretaría de Cultura de la Presidencia y Proyecto Arqueológico de El Salvador, San Salvador.
- 伊藤伸幸
2000 「カサ・ブランカ地区出土の石彫」『チャルチュアパ』京都外国語大学：211-214
2011 『中米の初期文明オルメカ』同成社、東京
Lowe, G. W., T. A. Lee, Jr., and E. Martinez E.
1982 *Izapa: An Introduction to the Ruins and Monuments. Papers of the New World Archaeological Foundation* 31, Brigham Young University, Provo.
- Medellín, Alfonso
1960 “Monolitos inéditos olmecas.” *La Palabra y el Hombre* 16: 75-97.
- Ohi, Kuniaki (ed.)
2000 *Chalchuapa.* Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, Kioto.
- Orrego C., M.
1990 *Investigaciones Arqueológicas en Abaj Takalik, El Asintal, Retalhuleu, Año 1988. Reporte No. 1.* Instituto de Antropología e Historia, Guatemala.
- Parsons, L. A.
1986 *The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast. Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology* 28, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington.
- Sharer, Robert J. (ed.)
1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador* I-III, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Shook, E. M. y M. P. Hatch, de
1999 “Las tierras altas centrales: Periodos preclásico y clásico.” En *Historia General de Guatemala* 1 (editado por J. Lújan M.), pp. 289-318.
- Tanaka, Yasushi y Kenji Tanaka
2014 “Sondeo geofísico en las áreas de Casa Blanca y El Trapiche, Chalchuapa.”, en *Informe Final del Proyecto “Investigación Arqueológica a Través de Sondeo Geofísico en el Área de El Trapiche, Chalchuapa” (2012-2014)*, editado por N. Ito, pp. 104-134.
- 田中地質コンサルタント
2012 『チャルチュアパ遺跡カサブランカ地区調査に関する地下探査業務報告書』田中地質コンサルタント、越前

キーワード：“様式化したジャガー頭部” 石彫、エル・トラピチュ地区、チャルチュアパ遺跡群、エルサルバドル、先古典期

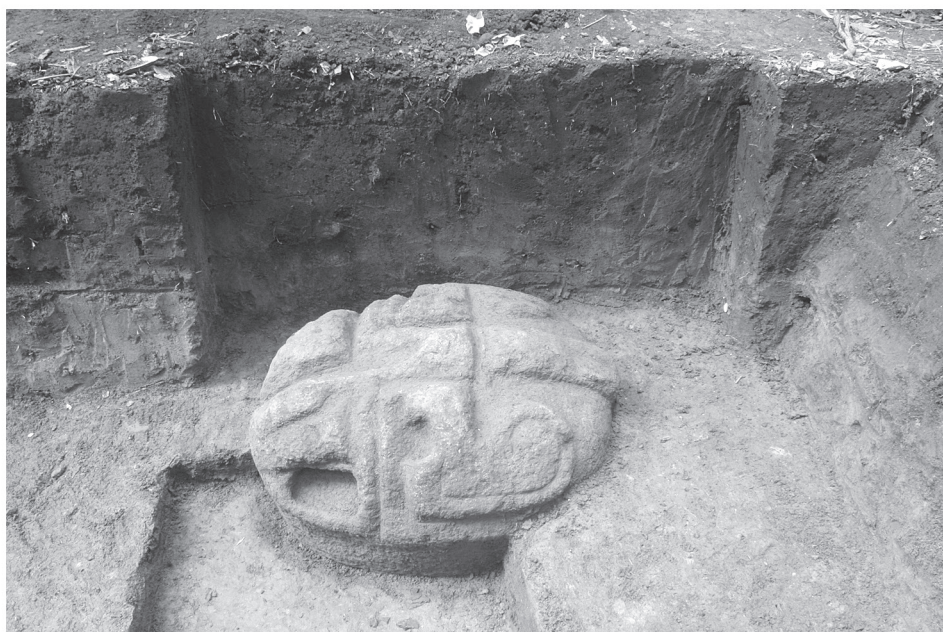


写真1 1号ジャガー頭部石彫出土状況



写真2 2号ジャガー頭部石彫出土状況



写真3 1・2号ジャガー頭部石彫



写真4 チャルチュアバ遺跡3号記念物



1



2

写真5 ラグーナ・デ・ロス・セロス遺跡1・2号記念物

1. 1号記念物、2. 2号記念物



1



2

写真6 ラ・ベント遺跡出土石彫

1. 詳細不明、2. 70号記念物



写真7 カミナルフユ遺跡10号記念物



1



2

写真8 4つの顔を持つ石彫

1. 出土地不明、2. カミナルフユ遺跡出土

Abstract

LAS CABEZAS DE JAGUAR ESTILIZADO, EN EL TRAPICHE, CHALCHUAPA, EL SALVADOR

Nobuyuki Ito

En la zona arqueológica de Chalchuapa, hasta la fecha, se han encontrado más de 30 monumentos, y en ellos, se puede observar varios estilos escultóricos, tales como olmeca, Izapa-Kaminaljuyu, Maya, Tolteca o Azteca entre otros. También se encuentra un estilo local de Cabeza de Jaguar Estilizado. Durante la 2ª Temporada de Campo, se encontraron dos cabezas del mismo estilo en el área de El Trapiche, Chalchuapa. Estas esculturas de piedra estaban colocadas o incrustadas al frente de la estructura E3-1, en el piso con la cara hacia el cielo.

En la parte inferior de la Cabeza 1 se encuentran diferentes características. Y en la parte superior de la Cabeza 2, se tienen distintos ojos, como muerte y vida. La Cabeza 1 tiene diferencias en la parte inferior o hacia abajo, mientras la Cabeza 2 en la parte superior. La colocación de la Cabeza 2 sugiere tener relación u orientación hacia el sol naciente y la Cabeza 1 hacia el sol poniente u ocaso. En ambas cabezas, se puede observar una representación de la dualidad en el periodo de Preclásico.

Keywords: Cabeza de Jaguar Estilizado, El Trapiche, Chalchuapa, El Salvador, Preclásico